

5. 実証研究で得られた成果

- ① 学校再編後 4 年目にして初めて一般開放に踏み切ることができた。学校施設内の親水広場、展望棟、学びの丘を整備して、豊かな環境で学べる喜びと本物に触れる体験ができるような機会となった。今後、11月17日には、学びの丘親水広場の周辺作業、12月1日は、クリスマスづくりや蝶のやってくる柑橘系や山椒などの樹木の植樹を予定している。学校運営協議会の各部会がそれぞれ動き始めていることから、教育委員会や学校管理職の手を離れて、学校運営協議会委員が自発的に動いていく取組が出始めている。学校運営協議会の会議毎に熟議を活発に行うことで、委員自身の自発的な行動も生まれ、成果が出始めている。
- ② 学校運営協議会での熟議の中から、日替わりで給食配膳ボランティアを行っていただいている。学校給食を媒体にして、地域の方々が児童生徒と触れ合い、コミュニケーションを深めるよい機会となっている。また、1週間連続毎日、同一学年がランチルームでの給食にしているので、配膳や片づけ等の時間が省け、おまけに昼休みの時間が多めにとれるため、昼休みが長くなり、児童にとっても教職員にとっても、大変有意義な取組となっている。この給食ボランティアの取組を定着させ、給食配膳以外にも、教職員の業務軽減を効果的に進める分野で働き方改革を推し進めていきたい。
- ③ 中高の両校長が組織内で加配教員の位置づけを明確にし、中・高校種間連携がより有意義なものとなるよう、首席を中核に据え、校務分掌や活動日の時間保障など同僚性を生かした組織運営ができるように連携体制を変更したことで、組織内での連携が広がりつつある。また、教科別研究組織を解体し、9つのテーマ別グループ（健康と運動、食と農業、言語活動、グローバル英語、自主活動、情報とICT、歴史・文化・自然・観光、グローバル能勢、支援）に改編し、今の課題に即した「カリキュラム・マネジメント」が行えるような小中高一貫教育研究の構築の基礎づくりを行うことができた。今後、専門的な見地から、指導助言をいただきながら、小中高一貫教育研究をさらに広げ、深める機会としたい。11月1日には、外部から70名余りの方々が能勢ささゆり学園に足を運んでいただいた。高校と行政のコラボ、小中高の校種を超える授業展開、能勢町の強みである「食・給食」。地道な取組に関心のある方が増え始めている実感がある。また、地域の方々からの参加者も増え、今後の展開が楽しみである。能勢分校が能勢町にある存在意義や存在価値を大阪府・全国へ波及できる効果が出始めている。町首長部局と能勢高校・豊中高校能勢分校との連続講座が開催できたこと、また、ドイツ・ブリロン市への視察が能勢町主催のもと、能勢町長及び町職員とともに能勢町・能勢分校連携視察団と一緒にドイツへ行けたこと自体が大きな成果である。この視察以来、町長及び町行政と高校の距離が一気に縮まり、町長と高校生の意見交換も行われた。また、今後、町総務課が進めていく施策について、可能な限りで高校生と意見交換し、高校生を通じて小中学生へその施策を伝えていくなど、子どもたちの夢や思いを大人が実現できるような仕組みづくりが進んでいる。
- ④ 高校生と小学生が福祉施設の方々に出荷するパンジーを一緒に育てる活動、高校生が夏休みの子どもの居場所づくり事業で小学生を楽しませる企画を実現できる場づくりが、少しずつ増えている。今後も、高校生が小中学生と関わる場、伝える場を作ることで、住民や保護者の能勢の高校生に対する見方が変わり、高校の魅力化へつなげていけるような取組に発展させている。
- ⑤ 今年、中学校の首席教員も学校運営協議会に参加するようになった。中学校教員が地域の方々と交流し、職場体験以外に能勢町をフィールドとした学びの資源（人的・物的）があまり活用できていなかった。中学校家庭科で、能勢に伝わる「郷土料理」の学びを通じて食育ボランティアとつなぐ取組は、今後の展開にうまくつなぐ機会としたい。学校運営協議会が橋渡しとなって、中学生が食育ボランティアから作り方を教えていただく。今後、中学校と地域をつなぎ、総合的な学習の時間における課題発見、課題解決ができるような学びのスタイルが構築できるように、特に「防災」「健康」「まちづくり」「自然」「食」等をメインに授業プランや地域学校協働活動プランを提案し続けたい。
- ⑥ 保幼小の体力づくり推進事業「能勢っこ！かけっこ！日本一！」の実施では、のせ保育所・みどり丘幼稚園・小学校の幼児・児童の体力の向上に一定の成果が表れた。（5月と10月の比較）ホームページにも動画をアップすることで、家庭の協力を得ることもプラス効果をもたらしている。その効果の表れが、11月9日した開催される「能勢っ子！かけっこ！ランRUNラン！」の参加者が160名を超えたことにも表れている。
- ⑦ 標本活用等事業と連携しながら、生涯教育課と連携し「むし？のせ？昆虫から見た能勢の自然展」の開催で来場者数550人が超えるイベントになった。また、「メルヘンりえこの能勢の生きものの作品展」を企画にも、300名を超える来場者があった。

標本活用等事業を通じて、学校教育課、生涯教育課、地域振興課がつながり、イベントを開催できた。参加者も多く、全国生物多様性ナンバーワン自治体としてのPRも行えた。能勢ささゆり学園そのものが、学校博物館と校地内の学びの丘や展望棟で、能勢町の「生物多様性」を学べる「ネイチャー・ミュージアム・スクール」となるように、今後も、能勢を愛するNPO法人や地元の方々、学校関係者、行政関係者等をつなぎ、児童生徒だけでなく、保護者、地域の方が学校博物館を訪れて能勢についての知見を深めていける機会を作りたい。

- ⑧ 近江正隆さんをお迎えした最大の成果は、今度の能勢町のまちづくりとひとづくりの根本の部分に「子どもたち」を置くという考え方を参加者が共有できたこと。未来を考えていくときに、まちの未来を担うのは、間違いなく主人公は「子どもたち」。能勢に住む子どもたちが、自分の町を好きになり、町の未来を考えていくときに、「こんなまちになってほしいな？」という思いを周りの大人がその実現のためにどれだけ動き、寄り添い、実現に向けた連携と協働の重要性が再認識できた。近江さんの話を聞いた高校生が、秋には北海道浦幌町で、一人で農村ホームステイ体験をするぐらい、強く子どもの心を驚つかみする内容のお話だった。今後、この講演会で出された貴重な意見を1つでも実現できるように実践していきたい。